

K-234

山形城三の丸跡  
(山形市立第一小学校敷地内)  
発掘調査報告書

2003

山形市教育委員会





山形城三の丸跡  
(山形市立第一小学校敷地内)  
発掘調査報告書

平成15年3月

山形市教育委員会



## 序

本書は、平成14年度に実施された、山形市立第一小学校改築工事に伴う山形城三の丸跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

山形城は、戦国末期、最上義光が築城したとされる城で、現在の山形市の基礎となっています。現在本丸及び二の丸跡と三の丸土塁跡が国の史跡に指定され、本丸跡では、復元整備を目的とした発掘調査が継続されています。

今回の発掘調査では、これまで、絵図面でしかわからなかった三の丸の堀跡の一部を確認できました。

山形市内には、「山形城跡」のほか、国指定史跡「鷲遺跡」などをはじめ、約300箇所の埋蔵文化財を包蔵する遺跡が確認されています。これらの遺跡は、郷土の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

こうした状況のもと、近年は市内各所において、住民福祉の向上を目的とした各種の社会整備に関する開発事業が増加しており、埋蔵文化財保護との調整の結果、遺跡の発掘調査に至る場合が多くなっています。また、史跡「山形城跡」の保存や整備を目的とした発掘調査も継続されているところです。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして、皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって、埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました工事関係者の皆様並びに関係各位に、厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

山形市教育委員会  
教育長 相田良一



## 例　　言

1 本書は、山形市立第一小学校校舎改築工事に係る「山形城三の丸跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は、山形市教育委員会管理課の依頼により、山形市教育委員会社会教育課が実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺跡名 山形城三の丸跡（やまがたじょうさんのみるあと）

所在地 山形市本町一丁目5-19 他

遺跡番号 中世城館遺跡番号 201-002

現地調査 平成14年6月12日～平成14年7月26日

整理作業 平成14年11月2日～平成15年1月31日

調査面積 1,560m<sup>2</sup>

調査主体 山形市教育委員会

調査担当者 社会教育課 課長 柳橋 幸男

　　課長補佐 江川 隆

　　文化財保護係長 小野 徹

　　主事 國井 修

4 本書の作成・執筆は、國井修が担当した。

5 発掘調査及び出土遺物の整理にあたっては以下の方々からご協力をいただいた。記して感謝申しあげる。

(敬称略)

阿部幸雄 荒井治良 小笠原吉二 粕谷和夫 岸野松雄 栗原清子 栗原武夫 篠利幸 佐藤昭司 佐藤博

志田英信 烏賀昭二郎 鈴木輝男 丹野ヒデ子 丹野廣 堤操 富沢啓広 中村光作 藤井富士夫 保科源則

水野一男(以上現地調査)

伊藤桂子 深瀬美貴子(以上遺物整理)

山形市立第一小学校 阿子島功(山形大学人文学部)

6 委託業務は下記の通りである。

埋蔵文化財調査補助業務 岡崎工業株式会社

空中写真撮影・平面図化 株式会社バスコ

7 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会で一括保管している。

## 凡　　例

1 本書で使用した遺構の分類記号は以下の通りである。

S D : 墓跡

2 本書で使用した地形図等は以下の通りである。

第1図 国土地理院発行 1:25,000地形図『山形北部』『山形南部』

第2図 山形市発行 1:2,500国土基本図 X-Q C 49-3 (山形市広域都市計画図『七日町』)

第3図 国土地理院発行 1:50,000地形図『山形』・山形県発行 1:50,000地形分類図『山形』

第4図 国土地理院発行 1:25,000地形図『山形北部』『山形南部』

第11図 山形市発行 1:10,000『山形広域都市計画図 5』

3 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

4 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。

5 グリッドの南北軸は、N-24° - Eを測る。

6 遺構実測図は、1/40・1/80・1/150の縮図で採録し、各々スケールを付した。また、図中における座標値は世界測地系による。

7 遺構実測図中の水糸レベルは標高を表す。単位はmである。

8 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序については、ローマ数字を、遺構覆土についてはアラビア数字で表している。

9 遺物実測図・拓影図は1/2・1/3の縮図で採録し、各々スケールを付した。

10 遺物実測図中の土器において、断面白抜きが土師器・瓦、●が須恵器、■が陶器・磁器を表す。

11 遺構計測表中における計測値の単位はcmを使用している。

12 遺物観察表中の計測地において、( )内数値は図上復元による推計値を、空欄は計測不能を示す。単位はmmを使用している。

13 遺構・遺物番号は、本文、表、挿図、写真図版とも一致している。

14 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版土色帳』(小山・竹原:1973)に掲った。

## 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	7
III 検出された遺構と遺物	
1 遺跡の層序	9
2 遺構と遺物の分布	9
3 堀跡及びその出土遺物	9
4 その他の出土遺物	10
IV 総括	
1 山形城三の丸堀跡の範囲	22
2 調査の成果	22
参考文献	24
報告書抄録	

## 表

表1 調査工程表	2	表4 SD 1 土層注記	17
表2 山形藩主一覧表	8	表5 遺物観察表	21
表3 SD 1 計測表	17		

## 挿 図

第1図 調査位置図	3	第8図 SD 1出土遺物(1)	18
第2図 調査概要図	4	第9図 SD 1出土遺物(2)	19
第3図 地形分類図	6	第10図 SD 1出土遺物(3)・遺構外出土遺物	20
第4図 旧町名図	6		
第5図 全体平面図	11・12	第11図 山形城三の丸堀跡推定図	
第6図 SD 1断面図(1)	13・14		25・26
第7図 SD 1断面図(2)	15・16		

## 図 版

図版1 調査区遠景・調査区全景

図版2 S D 1 堀跡完掘

図版3 S D 1 堀跡完掘

図版4 S D 1 堀跡断面

図版5 S D 1 堀跡断面

図版6 S D 1 堀跡断面

図版7 S D 1 F 3 出土遺物

図版8 S D 1 F 12出土遺物(1)

図版9 S D 1 F 12出土遺物(2)

図版10 S D 1 F 13、14出土遺物・

遺構外出土遺物(1)

図版11 遺構外出土遺物(2)

図版12 遺構外出土遺物(3)

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

今回の調査は、山形市立第一小学校校舎改築工事に伴い実施されたものである。現在の校舎は、昭和2年に落成した山形県下初の鉄筋コンクリート三階建の校舎で、平成13年11月20日に門柱及び柵とともに登録有形文化財に指定されている。そのような状況から、新校舎は、同じ敷地内に現校舎に隣接して建築されることとなり、また、現体育館を取壊し、その用地にプールと体育館が一体化した新体育館を建設することとなった。工事区域内には、最上時代の絵図面等から山形城三の丸堀及び武家屋敷が所在している可能性があったことから（第1図）、埋蔵文化財の扱いについて協議が行われた結果、工事に先立ち、記録保存を目的とした発掘調査を実施することで合意を得た。しかしながら、あくまでも絵図面で推定されたものであり、実際に埋蔵文化財が所在しているかは不明であった。また、施設の利用状況や工事の工程等から、事前に試掘調査を実施して埋蔵文化財の有無及びその範囲を特定することができなかった。そこで、当面は開発区域内の全面の発掘調査を実施することで関係機関の合意を得た。その後、工事の具体的な工程が決定したのを受けて、さらに協議を行った結果、改築工事に伴い実施される既存施設の解体工事と並行して試掘調査を実施し、調査計画の策定を行うこととなった。

試掘調査は平成14年2月15日、3月12日の2日間実施された。最初の調査は、新校舎建築部分について実施された。工事区域内に任意に試掘坑を設定して、重機により掘り下げ、遺構及び遺物の確認を行った。その結果、新校舎建築部分については、これまでの工事により、遺跡が既に破壊されていたことが確認された。次の調査は、体育館改築部分について実施された。新校舎建築部分と同様の方法で実施された。その結果、山形城三の丸跡と推測される土色の変化が確認された。しかしながら、調査区域が限定されていたため、その範囲を確認することはできなかった。そこで、旧体育館は、学校グランド面よりも1m程高い面に建設されており、解体後はグランド面と同一レベルに整地されることから、上記の試掘調査で確認できなかった堀跡の規模の把握とともに整地作業が埋蔵文化財に及ぼす影響を確認するため、平成14年3月18日に立会い調査を実施した。調査の結果、旧体育館の基礎がグランド面よりも深く掘削されていることが確認され、整地作業は埋蔵文化財に影響を与えないことが確認された。しかしながら、基礎による搅乱のため、堀跡の規模を把握することはできなかった。

以上のような調査結果から、新校舎建設部分については、埋蔵文化財が所在しないことが確認されたため、調査区域から除外し、体育館改築部分に限定して緊急発掘調査を実施することとなった。また、体育館改築部分は、かなりの範囲で搅乱されていることが予想されたが、堀跡の規模が不明なため、改築部分全域を調査区域とした（第2図）。

## 2 調査の方法と経過

調査は、平成14年6月13日から同年7月26日まで延べ44日間実施された（表1）。平成14年6月13・14日の両日で、学校敷地内への重機及び器材の搬入路を設置した。その後、児童の安全を確保するため、調査区域及び作業員通路等をすべて安全柵で囲った。

6月17日より調査区内の表土除去を開始した。除去の結果、堀跡が検出されたものの、調査区内のほとんどが搅乱されていることが確認されたので、精査区域を堀跡付近に限定した。また、堀跡内の近代以降の堆

## I 調査の経緯

積土については、重機により除去した。

6月20日より人力による面精査を開始した。前述の通り調査区内はほとんどが擾乱されていたが、堀跡の他に土坑や柱穴と推測されるピット等が検出された。また同日より堀跡の精査作業を開始した。

堀跡は調査区東端に位置し、任意に土層観察用ベルトを残しながら精査を行った。ただし、堀跡内にも体育馆の基礎が埋め込まれており、多くの観察用ベルトを設定することができなかった。また、併行してその他の遺構の精査を開始したが、堆積土の状況及び出土遺物から、近代以降の擾乱であることが確認された。

6月28日には、業者委託による基準点測量、7月4日には、5m四方のグリッドを設定した。7月17日には、遺構精査を完了し、7月18日には、平面図化を目的とした空中写真撮影を行った。

以上の作業と併行して、図面作成及び写真撮影等の記録作業を実施した。

現場における記録作業終了後、安全管理上から、調査区域の埋め戻しを行い、器材及び安全柵の撤収をし、器材搬入路の撤去を行った。調査区域が児童の安全及び校舎改築工事に支障をきたさないことを確認し、7月26日に調査を終了した。

表1 調査工程表

月 週	6							7																			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	
日	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	7	8	
安全施設等 設置・撤去																											
表土除去 埋め戻し																											
遺構検出																											
遺構精査																											
基準点測量 中等高測定																											
記録																											
備考	土日	作業休み	現地確認																								



第1図 調査位置図

I 調査の経緯



## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

山形市は、山形県の東部に位置し、宮城県と境を接する。南北約40km、東西約20kmの規模をもつ船底形の内陸盆地である山形盆地の南部にある。東には奥羽山脈が連なり、西部は奥羽山脈から張り出した白鷹丘陵により区切られる。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が、南東部から北西へかけて北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成している。また、周囲の山々から流下する大小の河川が小規模な扇状地を作り、複合扇状地を形成している。市域西部には、須川が北流し、その左岸には低位の河岸段丘が形成されている。馬見ヶ崎川下流及び須川沿岸には、自然堤防及び後背湿地が広がっている。これら河川の間は、沖積平野が広がり、部分的に旧自然堤防に由来する微高地が点在する。

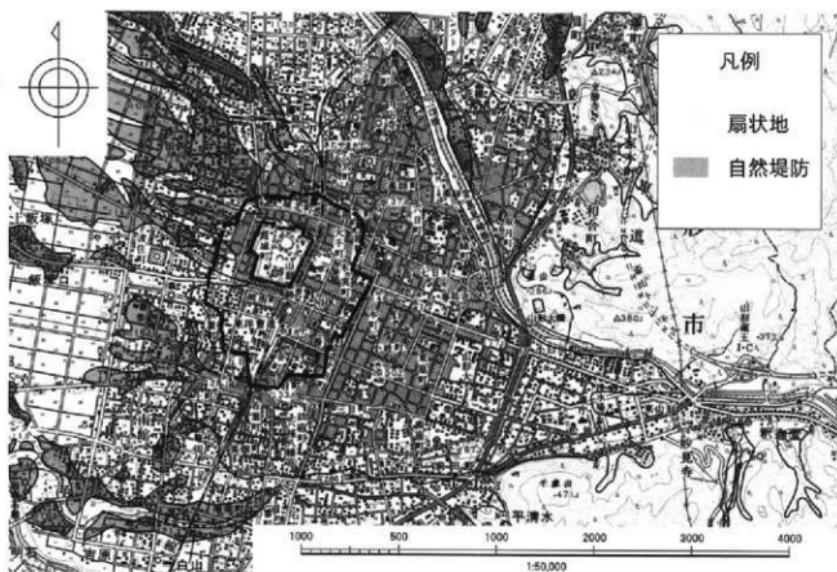
現在の山形市街地は、馬見ヶ崎川の形成する扇状地上に発展し、東から西へとやや傾斜する。山形城は、その扇状地の扇尖部～扇端部付近に位置する（第3図）。現在二の丸及び三の丸土塁及び堀の一部が現存しており、国指定史跡となっている。本丸部分については、復元整備を目的とした発掘調査が継続されている。三の丸は、現在の山形市の中心市街地を囲繞し、東西十四町十五間（約1553m）、南北十四町五十間二尺（約1617m）にわたる。周囲には、幅8間～11間の堀がめぐらされていたとされるが、現在では、堀跡はほぼ埋め立てられている。また、現在市内を北流する馬見ヶ崎川は、何度も流路を変えており、最上氏～鳥居氏頃は、現在の流路の南側、三の丸北辺をかすめるように西流していたが、鳥居氏による治水事業で、現在の流路となっている。旧馬見ヶ崎川は、現在堰としてその痕跡を辿ることができる。

山形城は、本丸、二の丸、三の丸の三重の堀をもつ輪郭式の構造をとる。最上氏時代の絵図面によれば、三の丸には、東側に4つ（錦口・七日町口・横町口・十日町口）、南側に2つ（吹張口・稻荷口）、西側に2つ（飯塚口・小田口）、北側に3つ（下条口・肴町口・小橋口）の計11の出入口があったとされる。現在では、その規模や形態は確認されないが、カギ形の道路が出入口付近に残っているものもあり、凡そその規模を推定できるものもある。また、中心市街地の各所には、不整な町割りや道路が散見され、往時の山形城下の痕跡を色濃くとどめている。

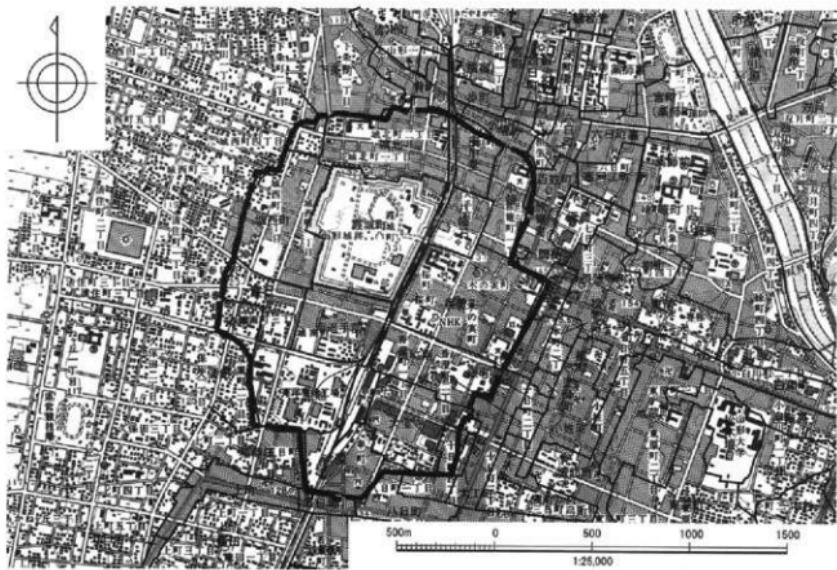
最上氏時代は、城内への出入口付近には、最上家の重臣の屋敷地が割り当てられ、その他は、主に上・中級家臣団の屋敷地となっていたようである。城下町は、三の丸外の北・東・南の三方に形成され、大きく分けて武家屋敷と町屋敷に分かれる。東及び南側の堀に隣接した羽州街道沿いには、商人町が配され、その外側に職人町、さらにその外側に下級家臣団の屋敷地があった。また城下の要所には、重臣の下屋敷が割り当てられていたようである。羽州街道、仙台へと通じる猿谷街道、鶴岡へと通じる六十里越街道の交差地点に位置し、紅花等の特産品の取引で非常に栄えていたという。現在では、地名が変更され、判り難いが、昭和38年段階の旧地名には、城下町の構造を反映した地名が残っている（第4図）。

今回の調査地点は、山形城三の丸東南、横町口の北側にある（第1図）。地目は学校敷地で、標高は143mを測る。横町口の位置は、現在の町割りからも特定でき、山形市立第一小学校南側に位置する山形中央郵便局北側道路がそれである。横町口は、城内から三の丸東側を南北に縱貫する羽州街道への出入口となっており、堀手口となっていた。

## II 遺跡の立地と環境



第3図 地形分類図



第4図 旧町名図

## 2 歴史的環境

山形城は、延文元年（1356年）に山形に入部した、最上家の祖先である斯波兼頼がその原型を作ったといわれている。現在残っている山形城は、斯波兼頼を始祖として最上家11代当主最上義光（12代とする説もあり。）の時代に整備改築されたもので、当時は、本丸（東西約144m、南北約133m）、二の丸（東西約433m、南北約474m）、三の丸（東西1553m、南北1617m）の三重の堀を有する大規模な平城であった。最上義光による山形城の整備改築の時期については、現存する文献資料から、凡そ1590年代とするのが通説である。最上義光は、不平をもつ一族の討伐や周辺の国人領主の服属を進め、山形における大名領国制を確立した人物で、最盛期で表高57万石、実収入で100万石以上の大名であった。

元和8年（1622年）、最上氏が改易後、島居忠政が入部し、山形城の大規模な改修を行っている。その範囲は、現存する絵図等によれば、概して二の丸まで、三の丸に関してはほとんど行われていないようで、屋敷割も、基本的に最上氏時代のものを踏襲していたようである。また、島居氏は、藩内の治水事業にも着手しており、馬見ヶ崎川が現在の流路となったのもこの頃といわれている。寛永13年（1636年）の島居家断絶以後、その後入部した保科正之以降は、幕領を経て、山形藩の石高は次第に減少していく（表2）。最後の藩主である水野氏時代は、約5万石であったといわれる。このような過程の中で、城の維持が困難となると、三の丸内の屋敷地が減り、畠地や用水路が増加していく。明和4年（1767年）に入部した秋元氏は18世紀後半に山形城の改修を行い、二の丸大手門外の東方に「新御殿」を建設し、三の丸東側に侍長屋を建設している。幕末には、三の丸東側の長屋群の他は畠地となっている。このような状況は、発掘調査の結果からも確認できる。平成9年から現在まで継続されている山形駅西口再開発事業に伴う城南町一丁目及び双葉町遺跡の発掘調査では、16~17世紀代の遺物が主体を占め、それ以降の遺物はほとんど出土しない状況を呈している。

明治維新以後は廢城となり、明治3年（1870）に、山形県が設置されると、三の丸堀が次第に埋め立てられていく。明治10年（1877年）の市街地図によれば、北西部の小田口から下条口にかけての堀は埋め立てられ、水田化している。明治14年（1881年）の市街地図では、東半の堀については、図上に現れなくなる。明治29年（1896年）には、山形に大日本帝国陸軍歩兵32連隊が配置され、その入営地として旧山形城二の丸がその用地となった。その際に本丸堀が埋め立てられるなど大規模な改変が行われている。三の丸内には、二の丸南側に練兵場が作られるなどの土地造成がなされている。明治34年（1901年）実測の大日本帝国陸地測量部発行の2万分の1地形図では、西側の堀の記載が残り、橋荷口から下条口までの範囲を確認することができる。その後、大正5年（1916年）の市街地図によれば、東側の堀跡は完全に記載されなくなり、昭和4年（1929年）の市街地図では、町割にその痕跡を残すのみとなる。昭和6年（1931）実測の大日本帝国陸地測量部発行2万5千分の1地形図では、明治34年実測のものと同様に西側の堀の範囲については、未だ記載がある。

現在、三の丸堀及び土塁の痕跡として最も顕著に残るのは、国指定史跡となっている歌懸稻荷神社（十日町）付近の土塁及び堀跡である。堀底から土塁上までの比高差約5m、長さ約30mの土塁が現存しており、その外側には幅約10m、深さ約3mの堀がまわっている。その他、主なものとして、十日町山形県保健センター敷地内には、横町口付近の石垣の一部が、山形市立第三中学校南側に位置する双葉公園には、公園の一部として推定される土塁の高まりが残っている。また、山形駅西口再開発事業に伴う双葉町遺跡の発掘調査では、橋荷口東側の土塁及び堀跡の一部が確認されている。

今回調査を実施した地点は、最上氏時代の絵図によれば、横町口の北側、最上家の重臣である鮭延越前守秀綱の屋敷地にあたる。最上家改易後、堀田氏頃までは、武家屋敷地として記載されているが、その後は、

## II 遺跡の立地と環境

単なる侍長屋の記載となっている。また、秋元氏時代の山形城改修の際には、侍長屋が建設されたといわれている。山形市立第一小学校が現在の敷地に移ったのは、明治22年（1889年）のことであるから、少なくとも、この頃までには、今回の調査地点の堀は完全に埋没していた（埋め立てられていた）と推定される。また、昭和13年（1938年）に校地を広げ、現在の敷地の広さとなった。

現在の校舎は、昭和2年（1927年）に落成したものである。前述のように、現校舎は、県下初の鉄筋コンクリート三階建の校舎で、平成13年11月20日に、門柱及び樋とともに登録有形文化財に指定されている。校舎の位置は、昭和2年以後、その場所を変えていないが、体育館・プール等の付帯施設は、たびたび位置を変えている。現校舎と同時に建設された体育館は、以前は、校舎南側、学校敷地のほぼ中央に位置していたが、昭和60年（1985年）に敷地東側に移っている。また、昭和54年（1979年）には、同じく校舎南側に隣接していたプールを改修し、同時に、グランドの整地作業を行っている。

表2 山形藩主一覧表

城主名	官職	石高	前封地(万石)	入封・移封年月日	移封地(万石)
斯波兼頼	修理大夫 (出羽守題)	不明	奥州大崎より 入部	延文元年八月（1356）入部 延文二年（1357）築城	
最上直家	右京大夫	不明			
最上満直	修理大夫	不明			
最上潤家	修理大夫	不明			
最上義春	右京大夫・修理大夫	不明			
最上義秋	右京大夫	不明			
最上満氏	治部大夫	不明			
最上義淳	左右衛門佐	不明			
最上義定	修理大夫	不明			
最上義守	出羽守・修理大夫	24			
最上義光	出羽守・少将	57			
最上家親	駿河守	57			
最上家信(義俊)		57		～元和八年八月（1622）	改易 近江・三河へ(1)
島居忠政	左京亮	24	岩木平(12)	元和八年九月（1622）	
島居忠恒	左京亮	24		～寛永十三年七月（1636）	断絶 第忠治・高達へ
保科正之	肥後守	20	信州高遠(3)	寛永十三年七月（1636） ～寛永二十年七月（1643）	会津若松(23)
幕領				寛永二十年七月（1643） ～正保元年正月（1644）	
松平直基	大和守	15	越前大野(5)	正保元年正月（1644） ～慶安元年六月（1648）	播州姫路(15)
松平忠弘	下總守	15	播州姫路(15)	慶安元年六月（1648） ～寛文八年八月（1668）	下野宇都宮(18)
奥平正能	大膳守	9	下野宇都宮(11)	寛文八年八月（1668） ～貞享二年六月（1685）	下野宇都宮(9)
奥平昌暉	美作守	9			
堀田正仲	下總守	10	下総古河(10)	貞享二年六月（1685） ～貞享三年七月（1686）	奥州白河(15)
松平直矩	大和守	10	越後日田(7)	貞享三年七月（1686） ～元禄五年七月（1692）	
松平忠弘	下總守	10	奥州白河(15)	元禄五年八月（1692）	備後福山(10)
松平忠雅	下總守	10		～元禄十三年正月（1700）	
堀田正虎	相模守	10	奥州福島(10)	元禄十三年正月（1700）	
堀田正春	内記	10		～延享三年正月（1746）	
堀田正亮	相模守	10		～延享三年正月（1746） ～明和元年六月（1764）	下總佐倉(10)
松平兼佑	和泉守	6	下總佐倉(7)	明和元年六月（1764） ～明和四年閏九月（1767）	三河西尾(6)
幕領					
秋元源朝	但馬守	6	武州川越(6)	明和四年閏九月（1767）	
秋元永朝	但馬守	6			
秋元久朝	但馬守	6			
秋元志朝	但馬守	6		～弘化二年十一月（1845）	上州館林(6)
水野忠精	和泉守	5	遠州浜松(6)	弘化二年十一月（1845） ～明治二年六月（1869）	廢藩
水野忠弘		5			

### III 検出された遺構と遺物

#### 1 遺跡の層序

今回調査を実施した部分は、学校敷地内であることから、かなりの搅乱を受けていた。

第Ⅰ層は、体育館解体後の整地層、第Ⅱ層は、体育館建築及びそれ以前の搅乱層、第Ⅲ層（地山層）は、黄褐色砂質シルト層で、この面で、遺構を確認している。それ以下は、砂疊層となる。

#### 2 遺構と遺物の分布

今回の調査で確認されたのは、山形城三の丸堀跡（SD 1）のみである。その他の遺構は、近代以降の搅乱であった。

#### 3 堀跡及びその出土遺物

##### SD 1 (第5~10図 図版2~12 表3~5)

（位置・重複関係・遺存状態）調査区東側E-1~8グリッドで確認された（第5図）。所々体育館基礎に搅乱されていた。また、上面は、体育館建築に際に削平を受けたようである。堀の西端は確認されたものの、東端は、調査区域外のため確認できなかった。

（規模・形態）幅は、調査区外に伸びるため、不明である。深さは、現存値で最大212cmを測る（表3）。

（堆積土）14層に区分した。その堆積状況から、堀跡は大きく4つの時期に区分しうる（第6・7図 表4）。第一の時期は、近代以降に堆積した層で、F 1・2がこれにあたる。

第二の時期は、近世～近代の堀の堆積土で、F 3・4がこれにあたる。F 3からは、近世の瓦、近代の陶磁器及び木製品が出土する。非常に均質で、粘性に富むことから、堀機能時には、灌水していたと判断される。また、F 4は、F 5以下の層を切って堆積していることから、堀の改修を行ったと判断される。

第三の時期は、堀跡機能停止時以降の堆積土で、F 5~12がこれにあたる。灰白色砂質シルトブロックを含むことから、人為堆積土と判断され、奈良～平安期の遺物が出土する。

第四の時期は、堀跡機能停止時～機能停止時の堆積土で、F 13・14がこれにあたる。F 14は、砂を帶状に含むことから、灌水と流水を繰り返していたと判断される。奈良～平安期の遺物が出土する。

（出土遺物）F 1~3、F 12~F 14からのみ出土している。F 1及びF 2に関しては、近代及び現代の搅乱層であるので、遺物は取り上げていない。F 3からは、近世～近代の瓦及び陶器が出土した。F 12~14では、奈良～平安期の土師器及び須恵器が出土した。今回の調査でSD 1内から出土した遺物の量は、整理箱にして1箱である（第8~10図 表5）。

F 3出土遺物：丸瓦及び鬼瓦と推定される瓦片、土師質陶器が出土している。いずれも残存状態が悪く、完全な形を推定することはできなかった。その内、比較的の残存状態が良い5点を図化した。

丸瓦(1~3)は、大きさを推定するものが出土しなかった。玉縁の付くもの(1)と不明のもの(2・3)がある。前者は凹面にコビキ痕が残る。凸面は、両者とも縱方向のケズリ調整がなされる。概してこれまで、山形城本丸等で出土した丸瓦と比して、やや小振りである。鬼瓦と推定される瓦片が1点出土している(4)。土師質陶器(5)は、内外面が黒色で、胎土があまりよくない。台が付くようである。身が円形を呈するのに対し、台は直線的である。器形は不明である。

### III 検出された遺構と遺物

F12出土遺物：須恵器及び土師器が出土している。図化したのは、比較的残存状態のよい9点である。

須恵器は壺、甕の器種が認められる。壺(6)は平底で底部切り離しが回転ヘラ切りである。甕(7~9)は、内面にアテ痕、外面にタタキ目が入る。内外面に酸化鉄の附着が認められる。また、内外面に火はね痕が顕著に認められるものもある(7)。土師器は、長胴甕(10~13)が出土している。口縁部はナデ調整、体部は内外面にそれぞれ縦位・横位のハケメ調整、底部には葉脈痕が認められる。内外面に酸化鉄の附着が認められる。

F13出土遺物：内面黒色処理の施された土師器、須恵器及び土師器が出土している。図化したのは、比較的残存状態のよい8点である。

内面黒色処理のなされた土師器(14)は、壺若しくは鉢と判断され、外面にミガキ及びケズリがなされる。奈良以前の所産と判断される。須恵器は、平底及び台付壺、甕の器種が認められる。平底の壺は、底部切離しが回転ヘラ切り(16)と回転糸切り(17)の2種が認められる。台付壺(18)の切離しは不明瞭で判別できなかつた。土師器は、丸胴の甕(19)と長胴甕が出土している(20~22)。前者は、内外面に横位のハケメ調整がなされ、その他の同層位出土遺物より時代がやや古いようである。内外面に酸化鉄の附着及び火はね痕が残る。後者は、調整及び附着物はF12出土遺物と同様である。

F14出土遺物：土師器が1点出土している(23)。小破片のため、器形は不明であるが、壺若しくは鉢と推測される。内面は黒色処理、外面はナデ調整がなされる。酸化鉄が付着する。奈良以前の所産と判断される。

(機能及び年代) 規模及び絵図面との照合により、山形城三の丸の堀跡であると判断される。出土遺物から、その構築年代を推定することはできなかった。また、平安期の遺物が出土しているが、層位と遺物の年代観にずれがあるので、後世の混入と判断される。三の丸の構築年代については、文献史料からは、1590年頃といわれている。また、F5~12は、人為堆積土と判断されるが、土星構築土であるかは、判断できなかった。

## 4 その他の出土遺物

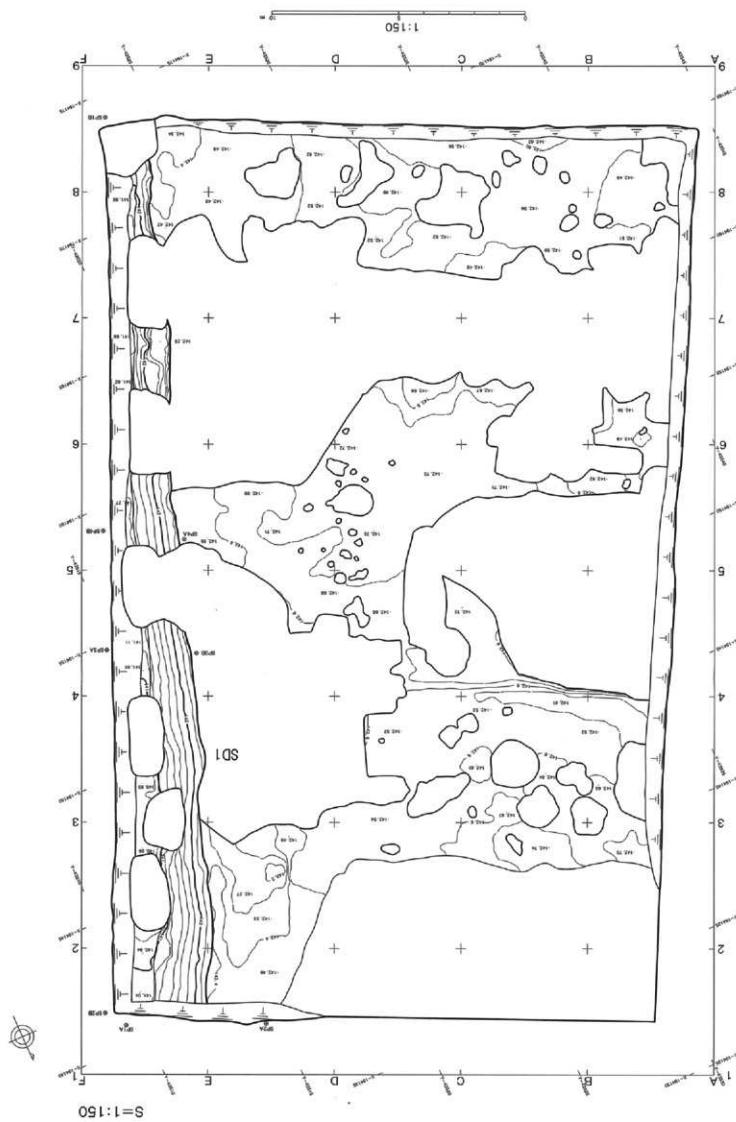
前述の通り、今回の調査では、近世の遺構として判断されたのはSD1のみである。その他は、学校建築に係る攪乱である。それら攪乱には、近世から近代にかけての遺物が混入していた。そのうち、残存状態がよいものをサンプルとして取り上げている。

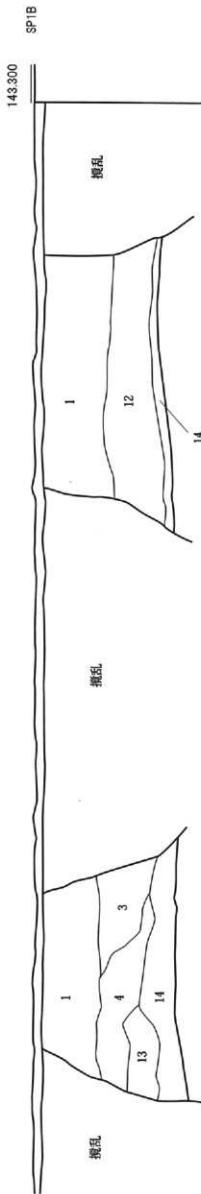
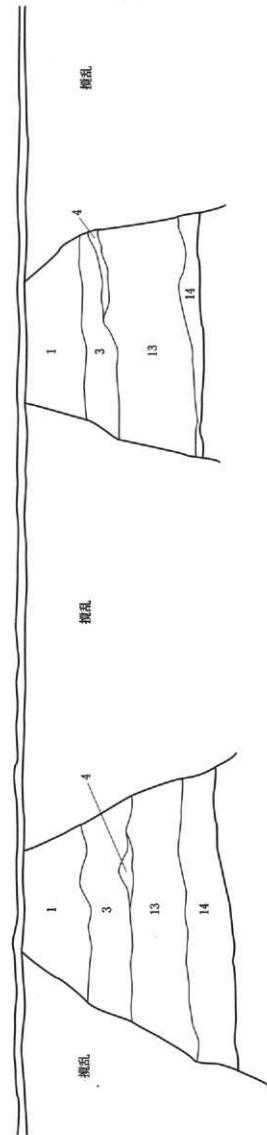
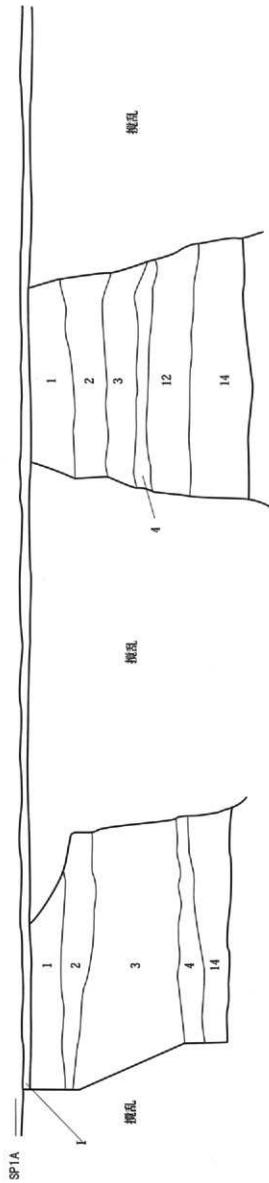
須恵器：壺の底部が1点出土している(24)。底部切離しは回転糸切りである。

瓦：4点図化している。平瓦(25・26)と丸瓦(27・28)が認められた。平瓦の図化に際しては、頭と尻の判別ができなかつたので、頭ないし尻と判断される部分を下にして図化している。平瓦は、非常に粗雑な造りで、頭(尻)が小口に向かって湾曲し、頭(尻)面に粘土塊が付着する。丸瓦は、SD1 F3出土瓦とほぼ同様の形態をしている。

陶磁器：盃1点を図化した(29)。内面に「歩三二除隊記念」とあることから、霞城公園に入営していた、帝国陸軍歩兵32連隊の除隊記念として配ったものと判断される。32連隊が、霞城公園内に入営したのは明治30年(1897年)のことであること及び第一小学校の経緯及び出土地点から判断して、昭和13年の敷地拡張時の攪乱による遺物と判断される。よって、遺物の製作年代は、明治30年～昭和13年の間に限定されると判断される。

図5 図 全体平面図





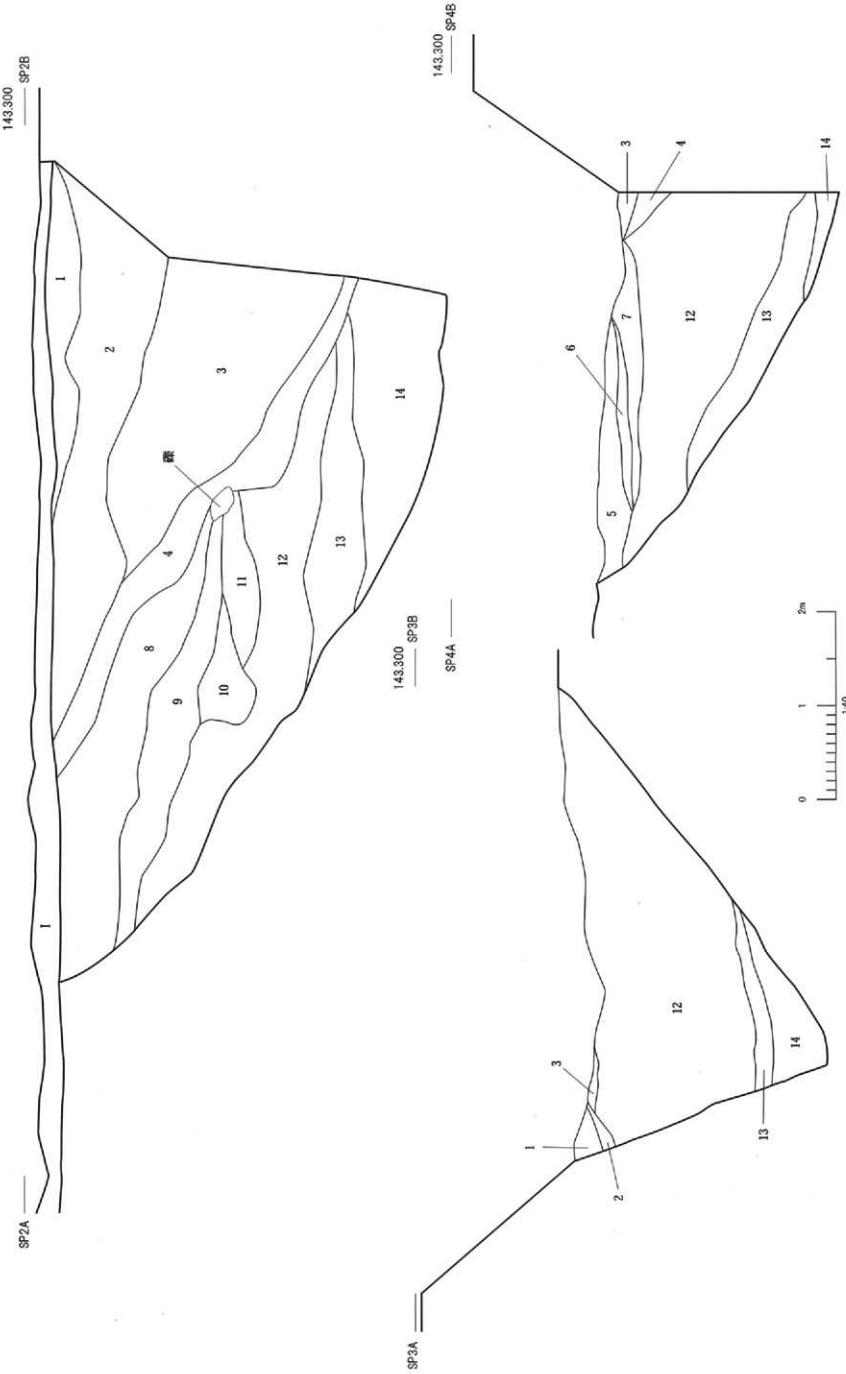


図7 図 SD 1断面図(2)

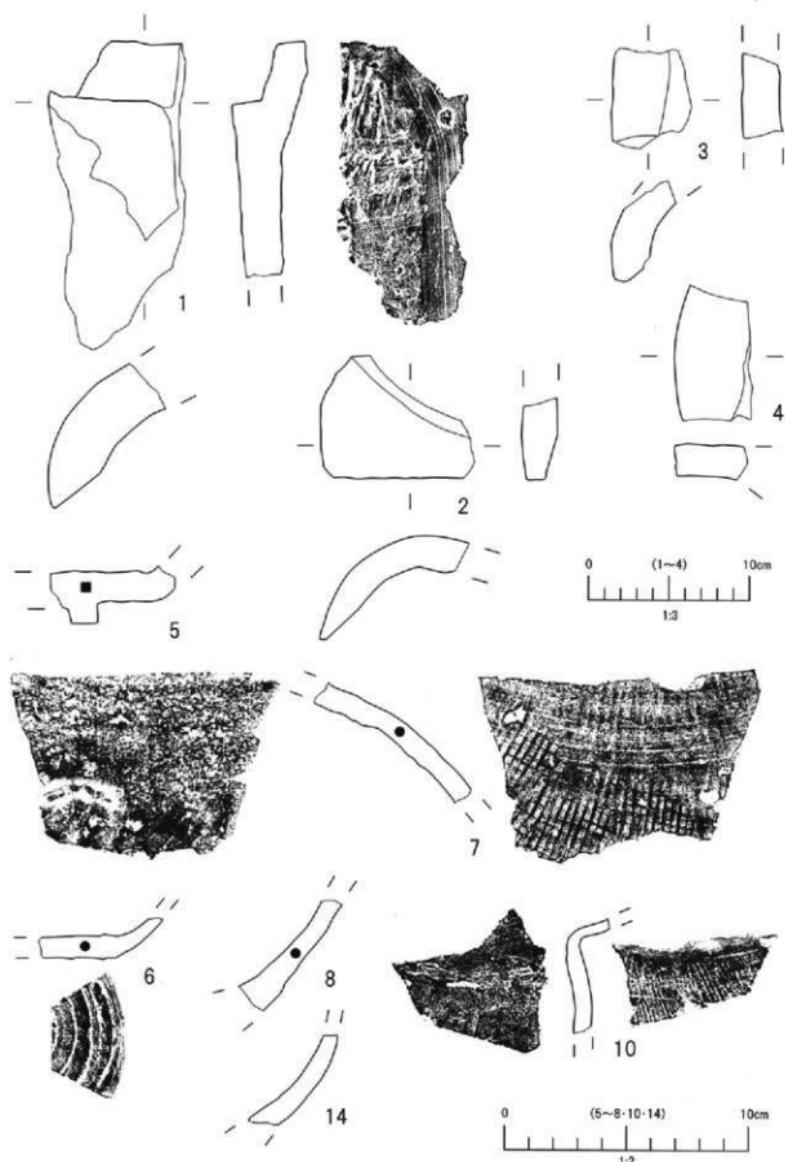
表3 SD1 計測表

遺構番号	検出地区	長さ	幅	深さ	主軸方向	遺存状態	床面状況	重複関係	備考	挿図	図版
SD1	E-1~8			212	N-22°-E	上面削平	平坦	体育館基礎に切られる。	埋没までに4つの時期の変遷が窺える。	5~7	1~6

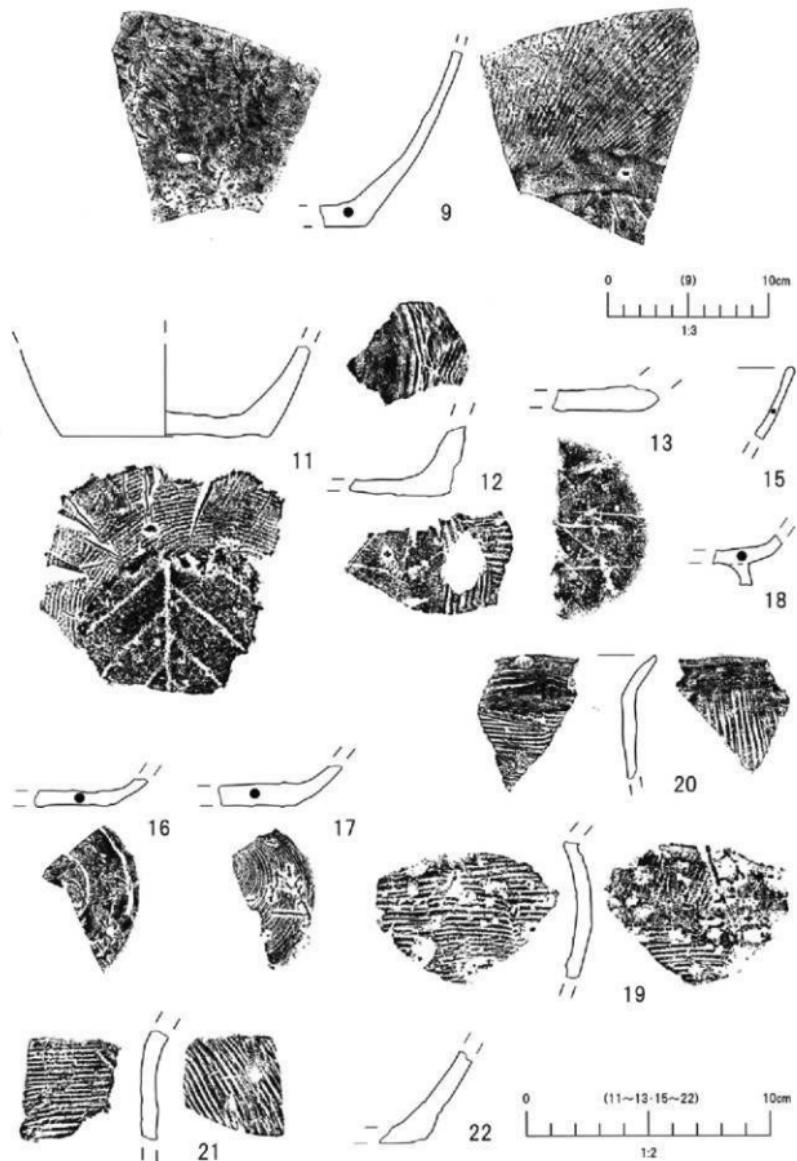
表4 SD1 土層注記

層位	土色・土質	注	記
I	10YR 6/4 にぶい黄褐色砂	グランド整地層。	
II	10YR 3/2 黒褐色シルト	擾乱層。	
III	10YR 5/6 黄褐色砂質シルト	均質。地山層。	
1	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	礫（直径5~10mm）含む。砂含む。酸化鉄含む。コンリート片、ガラス片等含む。近現代の埋め立て層。	
2	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	礫（直径5~10mm）含む。均質。	
3	2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色粘質シルト	ほぼ均質。非常に粘性に富む。近世の瓦、近現代の陶磁器等含む。近代の堆積土。	
4	2.5GY 3/1 暗オリーブ灰色粘質シルト	多量の砂含む。礫（直径3~5mm）含む。多量の酸化鉄含む。粘性に富む。無遺物層。	
5	10YR 5/1 黒灰色砂質シルト	10YR 8/2 砂質シルトブロック（直径5~15mm）多量に含む。無遺物層。人為堆積土。	
6	10YR 3/2 黒褐色砂質シルト	均質。平安期の遺物微量に含む。人為堆積土。	
7	10YR 4/1 黒灰色砂質シルト	10YR 8/2 灰白色砂質シルトブロック（直径2~10mm）わずかに含む。無遺物層。人為堆積土。	
8	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	10YR 8/2 灰白色砂質シルトブロック（直径2~10mm）わずかに含む。無遺物層。人為堆積土。	
9	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	10YR 8/2 灰白色砂質シルトブロック（直径2~10mm）多量に含む。無遺物層。人為堆積土。	
10	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	10YR 8/2 灰白色砂質シルトブロック（直径20mm）わずかに含む。無遺物層。人為堆積土。	
11	10YR 4/2 灰黄褐色シルト	10YR 8/2 灰白色砂質シルトブロック（直径5~10mm、30mm）帶状に含む。無遺物層。人為堆積土。	
12	10YR 3/2 黑褐色シルト	10YR 8/2 黑褐色砂質シルトブロック（直径2~10mm）わずかに含む。均質。平安期の遺物含む。人為堆積土。	
13	10YR 4/1 黒灰色砂	均質。鉄分含む。奈良~平安の遺物包含する。自然堆積土。	
14	10YR 4/1 黒灰色粘土	10YR 4/1 黒灰色砂を帶状に含む。粘性に富む。奈良~平安の遺物包含する。自然堆積土。	

III 検出された遺構と遺物

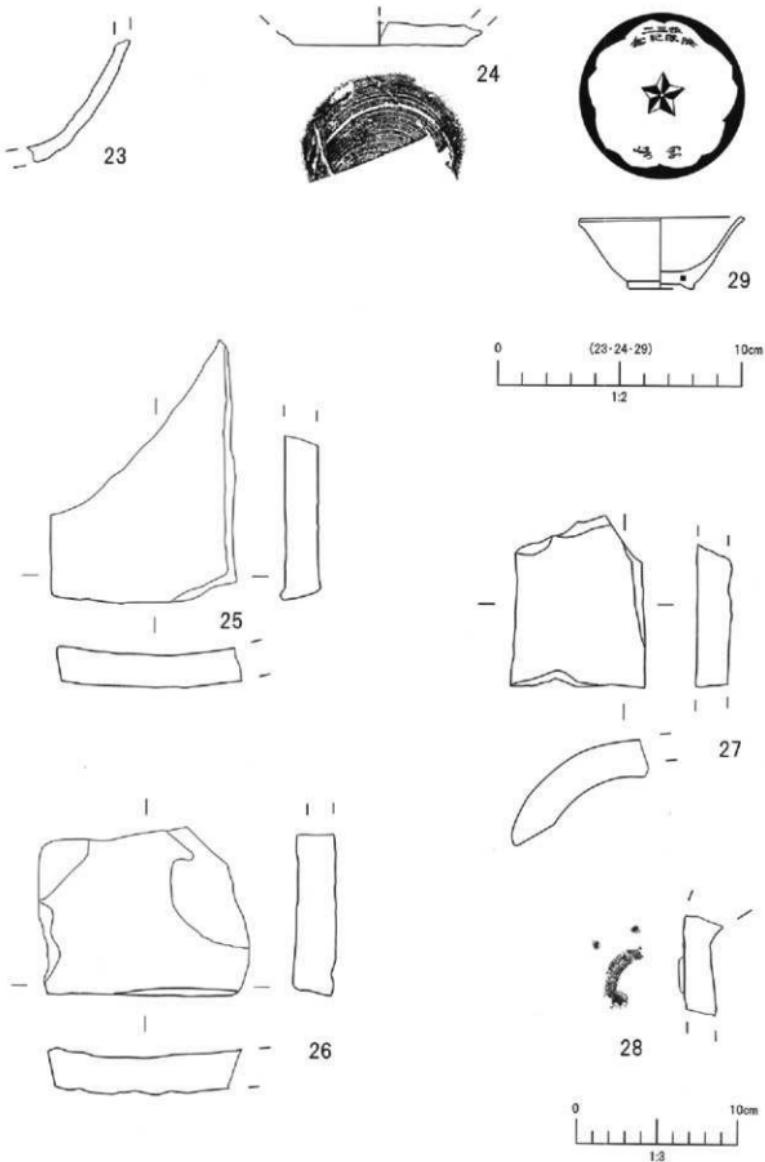


第8図 SD I 出土遺物(1)



第9図 SD I 出土遺物(2)

III 検出された遺構と遺物



第10図 SD I 出土遺物(3)・遺構外出土遺物

表5 遺物観察表

No.	出土地点	器種・形	時 期	残存部位	口径	底径	器高	器厚	胎土の混入物	調 整 等	備 考	捲 団番号	版番号
1	SD1F3	丸瓦	近世	胴 尻 玉縁				22	細砂	凸面: ケズリ 凹面: コビキ痕 (尻部)・布袋痕 (玉縁部)	玉縁が付く	6	7
2	SD1F3	丸瓦	近世	頭(尻)				20	細砂	凸面: ケズリ 凹面: 不明		6	7
3	SD1F3	丸瓦	近世	胴				24	細砂	凸面: ケズリ 凹面: コビキ痕		6	7
4	SD1F3	鬼瓦	近世	周縁				20	細砂			6	7
5	SD1F3	土師質器	近世?	底部				11	細砂		内外面黒色	6	7
6	SD1F12	須恵器壺	奈良～平安	底部				4	細砂	底部: 回転鋸切		6	8
7	SD1F12	須恵器壺	奈良～平安	体部(頸部付近)				9	凝灰岩質砂・粗砂	外面: タタキ 内面: アテ	外面酸化鉄付着・内面火はね	6	8
8	SD1F12	須恵器壺	奈良～平安	体部				7	凝灰岩質砂・粗砂			6	8
9	SD1F12	須恵器壺	奈良～平安	体部底部				6	石英・凝灰岩質砂・粗砂	外面: タタキ 内面: ナデ(底部付近)	外面酸化鉄付着	7	8
10	SD1F12	土師器壺	奈良～平安	口縁部				7	雲母・石英・砂	外面: ハケ・ナデ 内面: ナデ		6	9
11	SD1F12	土師器壺	奈良～平安	体部底部	(92)			7	石英・凝灰岩質砂・粗砂	外面: ハケ・ナデ 内面: 木葉痕	外面酸化鉄付着	7	9
12	SD1F12	土師器壺	奈良～平安	底部				10	雲母・石英・砂	外面: ハケ 底部: 木葉痕		7	9
13	SD1F12	土師器壺	奈良～平安	底部				9	石英・凝灰岩質砂・粗砂	内面: ナデ 底部: 木葉痕	外面酸化鉄付着	7	9
14	SD1F13	土師器壺 or鉢	奈良以前	体部				8	砂	外面: ナデ 内面: 黒色ミガキ	外面酸化鉄付着	6	10
15	SD1F13	須恵器壺	奈良～平安	口縁部				4	細砂		内面酸化鉄付着	7	10
16	SD1F13	須恵器壺	奈良～平安	底部				6	凝灰岩質砂・粗砂	底部: 回転鋸切	内面酸化鉄付着	7	10
17	SD1F13	須恵器壺	奈良～平安	底部				5	細砂	底部: 回転糸切	外面酸化鉄付着	7	10
18	SD1F13	須恵器壺	奈良～平安	底部				5	細砂		外面酸化鉄付着	7	10
19	SD1F13	土師器壺	奈良以前?	体部				6	雲母・凝灰岩質砂・粗砂	内外面: ハケ	外面酸化鉄付着・火はね	7	10
20	SD1F13	土師器壺	奈良～平安	口縁部				6	砂	内外面: ハケ		7	10
21	SD1F13	土師器壺	奈良～平安	体部				6	雲母	内外面: ハケ	外面酸化鉄付着	7	10
22	SD1F13	土師器壺	奈良～平安	底部				7	雲母・石英・砂	内外面: ナデ 底部: 木葉痕	外面酸化鉄付着	7	10
23	SD1F14	土師器壺 or鉢	奈良以前	体部底部				5	雲母・粗砂	内外面: ナデ 内面: 黒色ミガキ	外面酸化鉄付着	8	10
24	III層	須恵器壺	奈良～平安	底部	(68)			8	海地骨針・凝灰岩質砂	底部: 回転糸切		8	10
25	搅乱	平瓦	近世	頭(尻)				20	細砂			8	11
26	搅乱	平瓦	近世	頭(尻)				23	細砂			8	11
27	搅乱	丸瓦	近世	胴部				25	細砂	凸面: ケズリ 凹面: コビキ痕		8	12
28	搅乱	軒丸瓦	近世	瓦当					細砂		三つ巴紋	8	12
29	搅乱	陶磁器壺	近代	完形	77	26	29	2			歩三二除隊記念	8	12

## IV 総括

### 1 山形城三の丸堀跡の範囲

山形城三の丸堀の範囲の推定については、これまで、譽田による推定（譽田・1996）、東北芸術工科大学田中哲雄研究室による推定（東北芸工大・2000）による記載が主なものである。今回の発掘調査では、前記文献の範囲とややずれる位置で堀跡が検出されたことから、改めて、古絵図等から三の丸の範囲の推定を行ってみた。

推定の際に使用した地図は、現存する各種絵図のうち、「最上家在城諸家中町割図」、「正保年間山形城下絵図」、「水野氏時代山形城下絵図」の五種と明治10年五十嵐太右衛門出版予定「山形縣山形市街全圖」、昭和9年大日本帝国陸地測量部発行1:25,000地形図「山形北部」・「山形南部」、昭和4年山形市役所発行1:3,000「山形市街図」、及び山形市作成1:10,000山形広域都市計画図である。

推定は、上記の地図を拡大・縮小し、縮尺を1万分1の1に統一した後、広域都市計画図に重ね合わせる方法で行った。その後、現在残っている三の丸土塁及び堀跡や、上記文献及び発掘調査で確認された堀の位置から範囲の修正を行った。古絵図及び明治10年「山形縣山形市街全圖」は縮尺が不明なことから、全体の形状の参考とするに留めた。三の丸堀のうち、JR奥羽本線以西については、昭和9年発行地形図を基に推定している。JR奥羽本線以東については、昭和4年発行山形市街地の字界及び記載されている町屋の地割から推定している。この地図は道路等が歪んでおり、地図としてはやや正確さに欠けるものの、当時の字界や町割がよく示されている。重ね合わせの際には、顕著な道路や建物を基準に補正して行っている。また、堀の記載は、山形市発行1:30,000「山形市河川網図」の記載による。以上の方法で推定を行った結果が第11図となる。先に示した、旧町名の位置と若干のズレが生じているが、旧町名図が昭和38年段階のものであり、また、図そのものに歪みがあるためと思われる。

今後は、現地観察や聴き取りによる範囲の確認や、地籍図による復元等の実施の他、山形市内寺社の縁起等の調査が必要であると考える。

### 2 調査の成果

今回の調査は、山形市立第一小学校校舎改築工事に伴い実施されたものである。山形城三の丸堀跡が検出され、東側堀の一部についてその位置を特定することができた。

堀跡内からは、近世の遺物はほとんど出土せず、その構築年代を特定することはできなかった。また、堀跡内には、奈良～平安期の遺物が混入していたことから、今回の調査区周辺に、当該期の遺跡が所在していたことが推測される。調査区周辺は、市街地となっており、現時点で、その存在を確認することは困難である。現在山形市内で確認されている奈良～平安時代の集落跡は、その多くが、馬見ヶ崎川等が形成する扇状地の扇端部付近に分布しており、扇央部で発見された例は皆無である。出土層位の堆積土が、人為堆積及び水成堆積であることが観察されることから、遺物そのものが遠隔地から運ばれてきた可能性も否定できない。しかし、馬見ヶ崎川扇状地上には、数多くの小河川が流下していたと推測されており、第一小学校付近にも埋没旧河道が存在するとされているので、扇央部においても、河川沿岸には、古代の集落が存在していた可能性がある。よって、今後はそれらの推測を考慮にいれて、調査を実施する必要がある。

堀内の埋土の堆積状況からは、埋没までに4つの段階を経ることが分かったが、その年代の変遷は出土遺

物から推定することはできなかった。また、ある時期に堀が改修されたと判断される土層の変化を確認したが、出土遺物からその年代を特定することはできなかった。ちなみに明和6年（1769年）の『山形城修復覚』の絵図に記載されている「出羽国山形城取縮修復の覚」によれば、当時、三の丸の門・石垣・土塁・堀ともすべて大破していたので、城内各所を修復したとされている。その際、今回の調査区域南側に隣接している横町口も、最上時代には、石垣を積んだ枠形があり、櫓門があったものを、冠木門に取替え、門内に梁行二間、桁行四間の番所を建てたとされる。これら修復の際に、堀の改修を行ったとも考えられるが、図中の書き入れの信憑性についても異議が唱えられているので、堀の改修時期が、明和年間であると比定はできない。

堀跡最下層では、漏水していた状況が観取された。土層から推定される漏水域は、標高にすると141.5m程度である。現在は、湧水しておらず、また、大正9年11月実測による山形市街地の井戸最低水位の計測結果では、山形市立第一小学校付近における地下水位は、標高にすると132m程度である。

近世期の馬見ヶ崎川扇状地の地下水位については、平成10年度に（財）山形県埋蔵文化財センターが、調査した城南一丁目遺跡の調査成果により、およその推測がなされている。この遺跡は、馬見ヶ崎川の形成する扇状地の扇端部に立地し、調査では、中～近世期の井戸跡が多数検出されている。その底面の計測値から、山形駅西口付近での近世初頭における地下水位は、129m程度であると推測されている。前記の井戸最低水位の計測結果では、城南一丁目遺跡付近では、123m程度である。この差をそのまま今回の調査区に当てはめると、今回の調査結果の漏水域よりやや低いことになる。城南町一丁目遺跡付近の地下水位の変化と今回の調査区における地下水位の変化が同様であるとは限らないが、三の丸堀のうち、東側のものについては、地下水によって水を張ることはほぼ不可能であると推測される。

河川からの山形城下への導水は、馬見ヶ崎川から伸びる「御殿堀」、「笠堀」、「八ヶ郷堀」、「宮町堀」、「双月堀」の通称「五堀」といわれる堀によりなされたと考えられている。五堀の構築時期については明らかではないが、最上氏時代からあったものを鳥居氏時代に整備し、流域下の農民への灌漑水利権が形成されたとされている。その内、城内へと水路が続くのは、「御殿堀」及び「笠堀」の2つであり、この堀により、三の丸堀への導水がなされていたようである。

三の丸の埋立ては、奥羽本線以東は、通説によれば、明治初期に行われたとされている。前章でも述べたように、この地に第一小学校が建築されるのは、明治22年頃であるので、少なくともこの時期には、堀跡が埋没していたのは確実であるが、出土遺物から、埋め立てた時期を特定することはできなかった。

調査区付近は、最上氏時代、重臣の鮎延越前守の屋敷地にあたるが、関連する遺構は確認されなかった。三の丸の荒廃若しくは、近代の都市化に伴い破壊されたと判断される。

以上が今回の調査で判明したことであるが、三の丸堀の構築時期、改修時期、埋没時期等の年代の特定は、今後さらに調査が必要である。

## 参考文献

- 阿子島功・黒坂雅人 2002 「山形市馬見ヶ崎川扇状地扇端部の城南一丁目遺跡の地下水位」『山形応用地質』第22号  
山形応用地質学会
- 大友義助・著沢良夫 1969 『真室川町史』 真室川町
- 川崎浩良 1949 『山形の歴史』 後編 出羽文化同文会
- 黒坂雅人・郡井修・福村圭一 1999 『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』  
山形県埋蔵文化財センター調査報告書第69集 (財)山形県埋蔵文化財センター
- 高橋信敬 1974 『最上時代山形城下絵図』 誌趣会
- 武田安治 1941 『山形城に就て』『山形縣内に於ける古城跡の研究』 山形縣中央圖書館(現山形縣立圖書館)
- 武田和宏・齊藤仁 1996 『山形城本丸堀発掘調査概報』 山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第3集 山形市教育委員会
- 坪井利弘 1976 『日本の瓦屋根』 理工学社
- 坪井利弘 1986 『国體 瓦屋根(改訂版)』 理工学社
- 東北芸術工科大学田中哲雄研究室監修 2000 『史跡「山形城跡」(三の丸)整備基本構想』 山形市教育委員会
- 山形市史編さん委員会編 1973 『山形市史』 上巻 山形市
- 山形市史編さん委員会編 1975 『山形市史』 下巻 山形市
- 山形市史編さん委員会編 1976 『山形市史』 生活・文化編 山形市
- 山形市生活環境課・山形地域地下水利用対策協議会編 1988  
『馬見ヶ崎川扇状地における地下水人工涵養施設建設設計画にかかる畠地及び水源基礎調査報告』  
山形市生活環境課・山形地域地下水利用対策協議会
- 山形市立第一小学校 1980 『創立九十周年記念誌』 山形市立第一小学校
- 山形市立第一小学校 1990 『創立百周年記念誌』 山形市立第一小学校
- 木地文夫・阿子島功 1982 『II 地形分類』『土地分類基本調査 山形』 山形県

第11図 山形県三の丸道路指定図

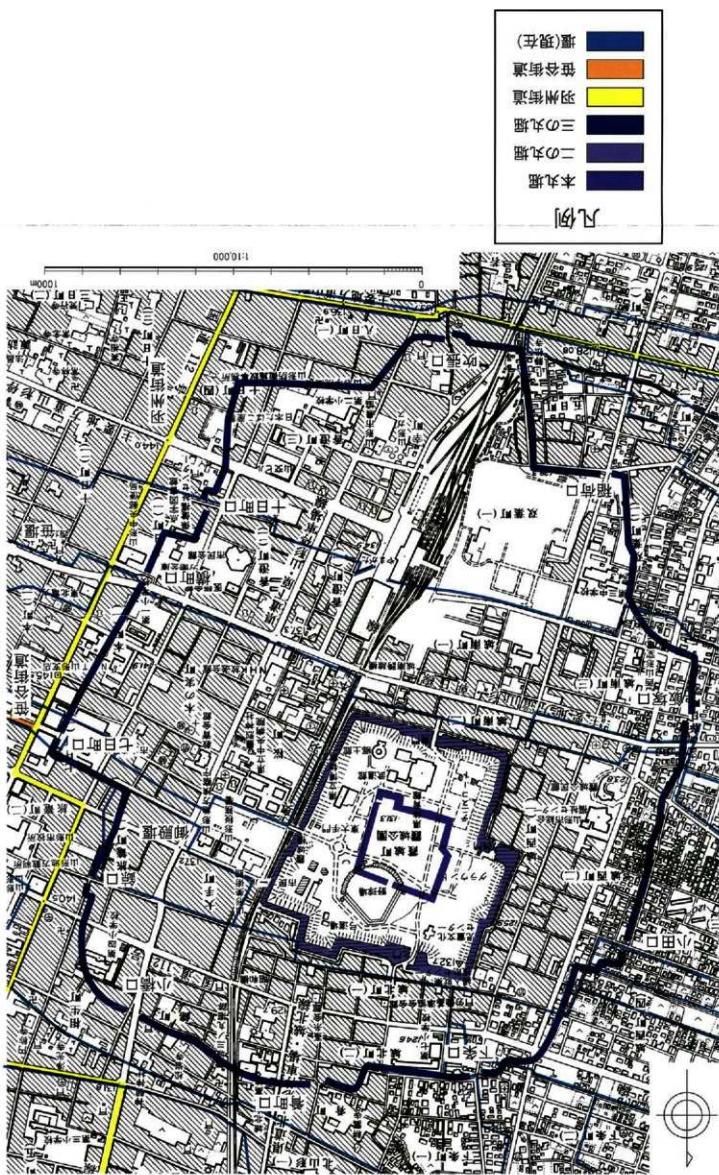
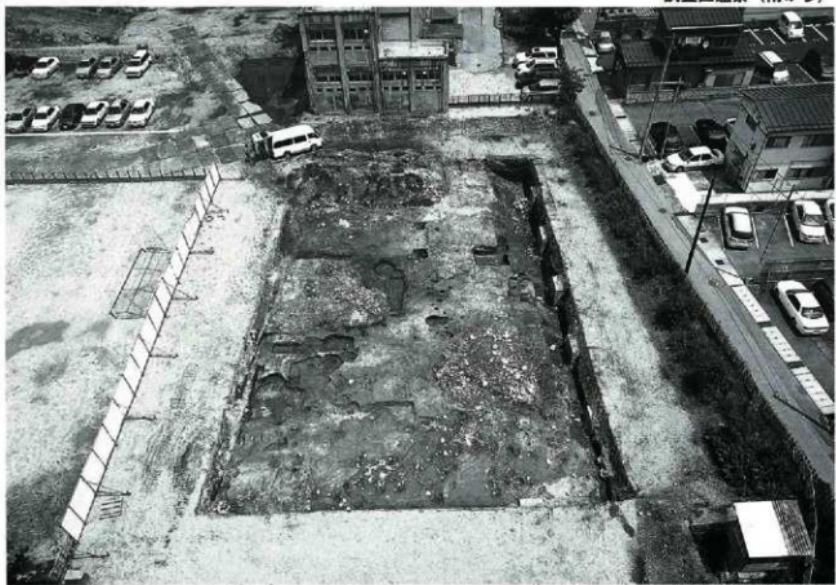


図 版

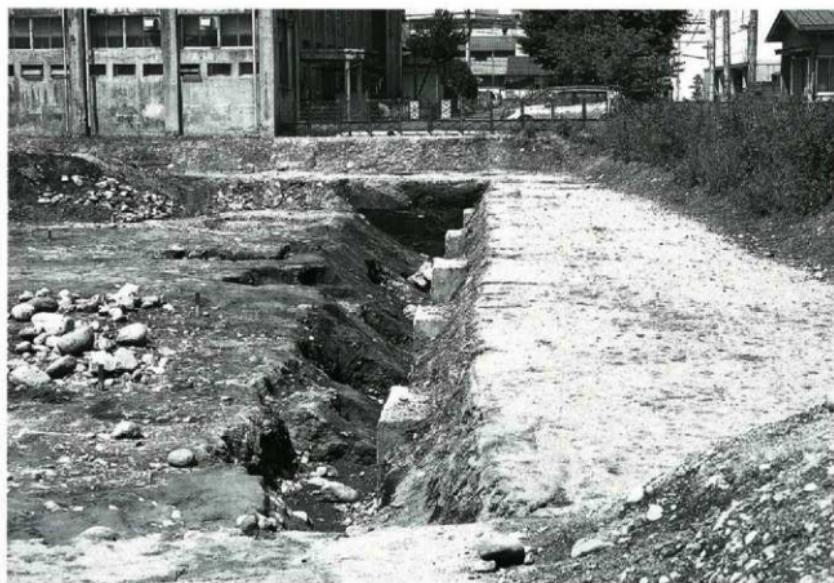




調査区遠景（南から）



調査区全景（南から）



S D 1 堀跡完掘（南から）



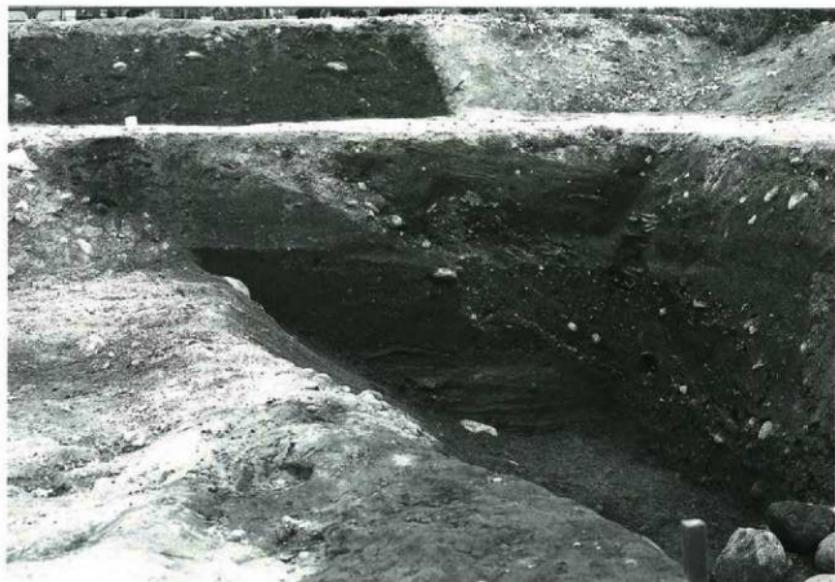
S D 1 堀跡完掘（南から）



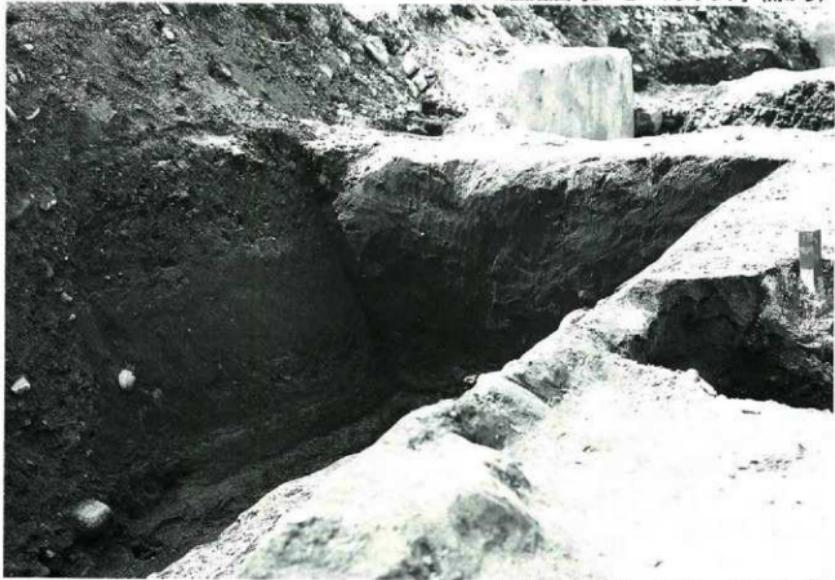
S D 1 堀跡完掘（北から）



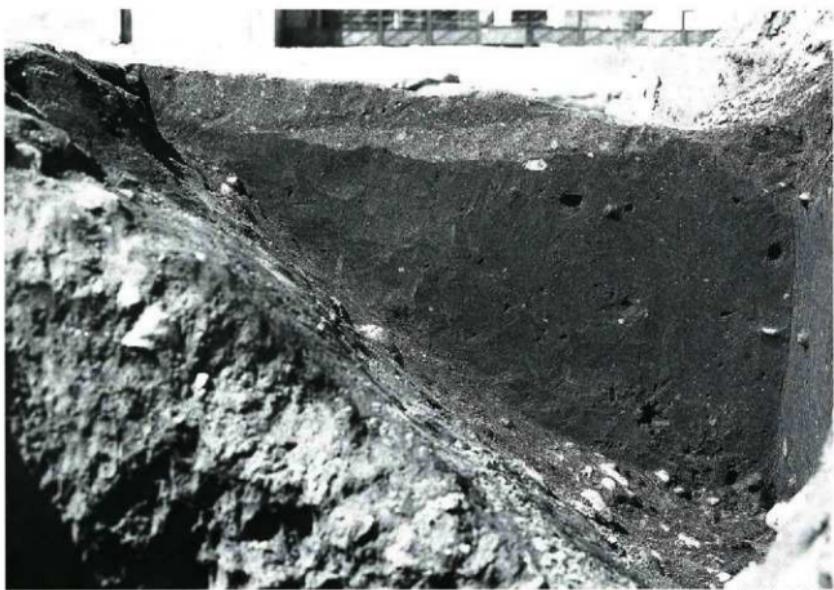
S D 1 堀跡完掘（北から）



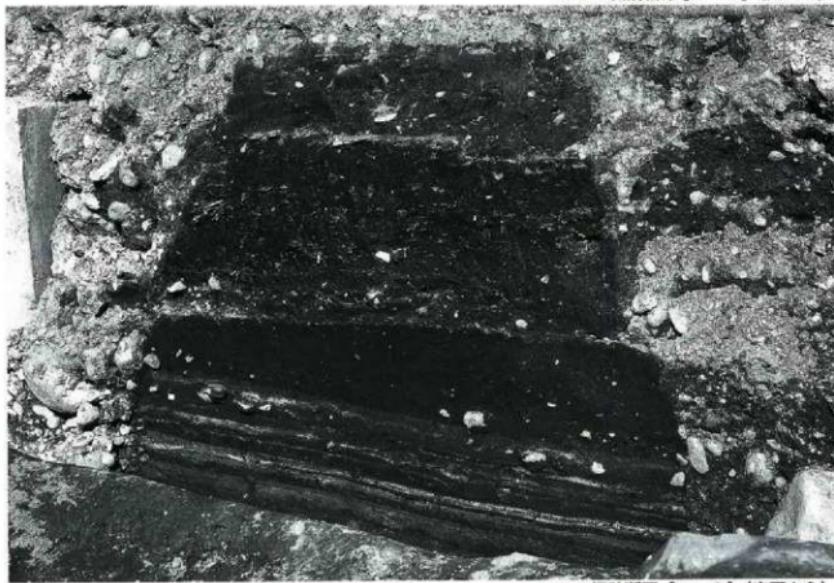
S D 1 堀跡断面 [D・E-1 グリッド] (南から)



S D 1 堀跡断面 [E-3 グリッド] (北から)



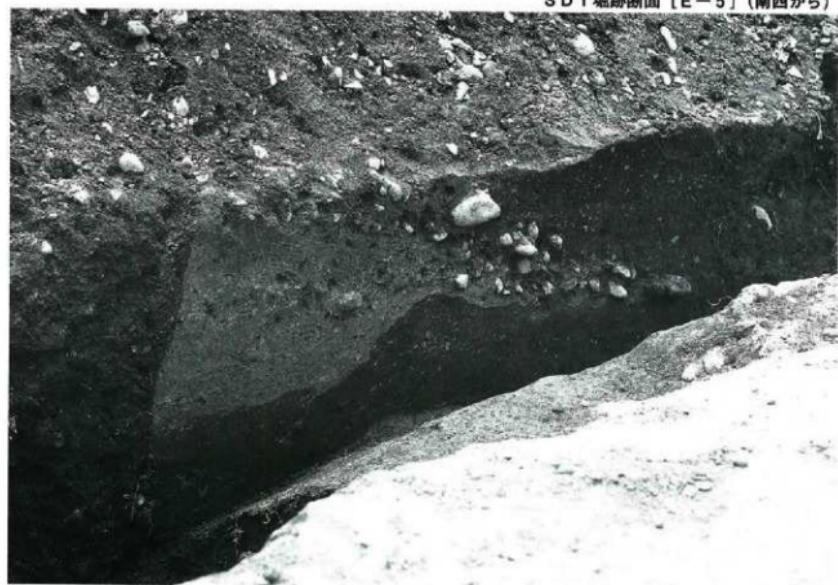
SD 1 堀跡断面 [E-5] (南から)



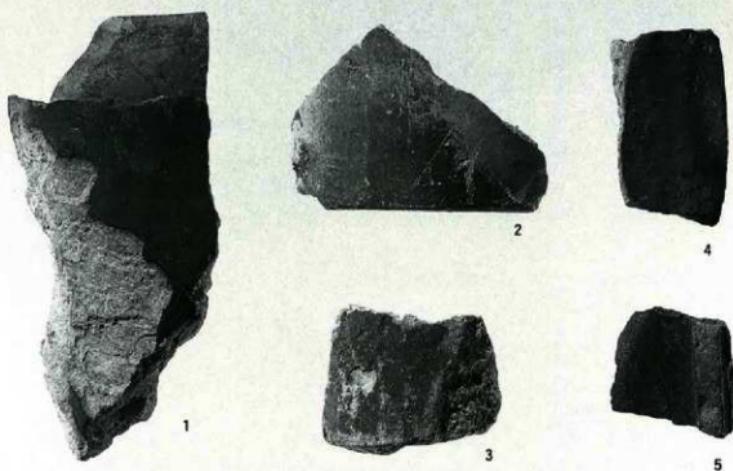
SD 1 堀跡断面 [E-3] (南西から)



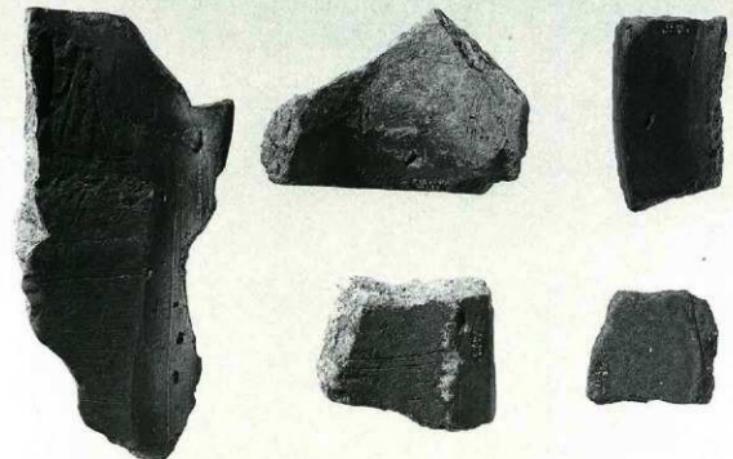
SD 1 堀跡断面 [E-5] (南西から)



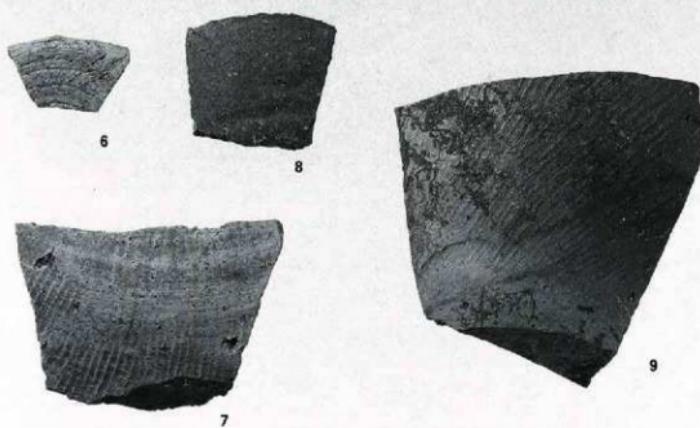
SD 1 堀跡断面 [E-6] (北西から)



1~5 (表)



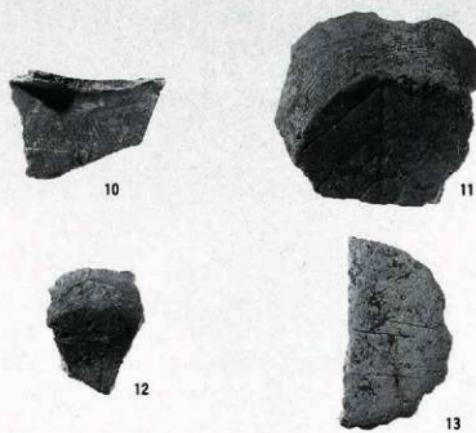
1~5 (裏)



6～9 (表)



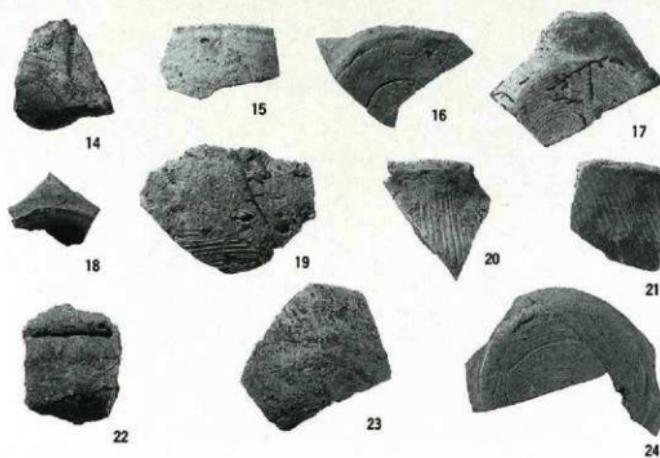
6～9 (裏)



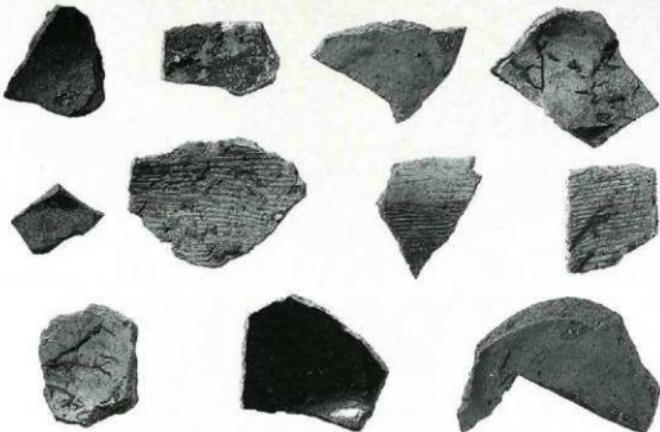
10~13 (表)



10~13 (裏)



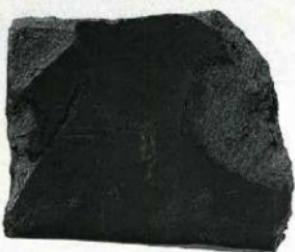
14~24 (裏)



14~24 (表)



25

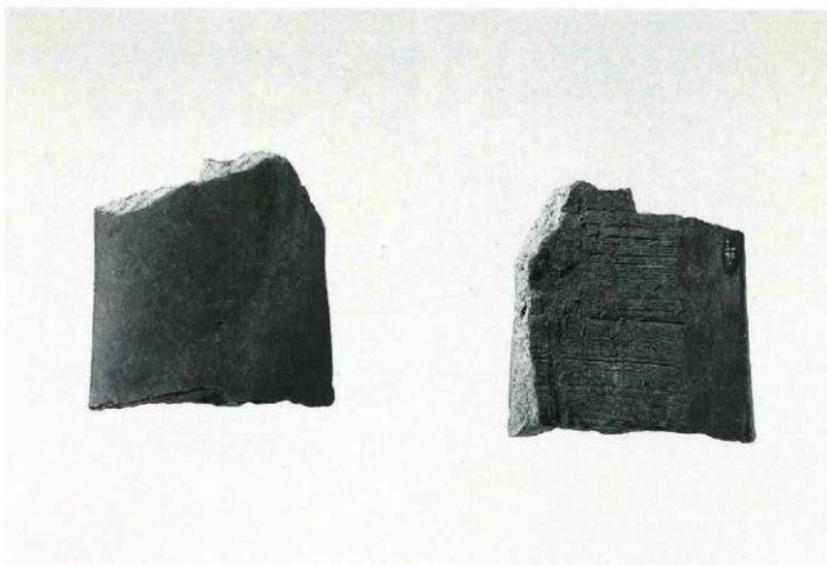


26

25・26 (表)



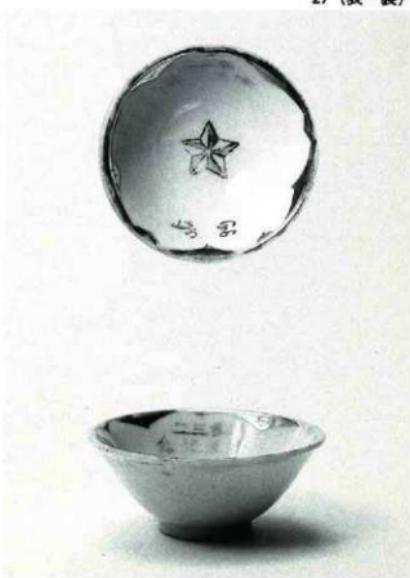
25・26 (裏)



27 (表・裏)



28



29

## 報告書抄録

ふりがな	やまがたじょうさんのまるあと(やまがたしりつだいいちしょうがっこしきちない)はつくつちょうさほうこくしょ							
書名	山形城三の丸跡（山形市立第一小学校敷地内）発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	國井修							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅篭町二丁目3番25号 TEL 023-641-1212							
発行年月日	2003年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やまがたじょう 山形城 きのの きららの 三の丸跡	やまがたけん 山形県 やまがたし 山形市 ほんぢ町 本町一丁目 5番19号	市町村	遺跡番号	38度 14分 59秒	140度 20分 9秒	20020612 ～ 20020726	1,560m <sup>2</sup>	山形市立 第一小学校校舎改 築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山形城 三の丸跡	城館跡	近世	堀跡1条	土師器(壺・甕) 須恵器(壺・台付 壺・壺蓋・甕) 瓦 陶器 陶磁器	三の丸堀跡の一部を確認した。ただし、堀跡内の出土遺物は、平安時代及び近代以降のものがほとんどで、構築年代を確認することはできなかった。		総出土箱数1箱	

### 山形城三の丸跡（山形市立第一小学校敷地内）発掘調査報告書

2003年3月31日発行

発行 山形市教育委員会

〒990-8540

山形県山形市旅籠町二丁目3番25号

TEL 023-641-1212

印刷 中央印刷株式会社

〒990-0051

山形県山形市鋼町一丁目1番5号

TEL 023-631-5533

